

日常心理学の擁護

鈴木貴之

我々は、人の振る舞いを彼の心の状態によって理解するということを日常的に行っている。たとえば、ある人が本屋に入っていったのは、彼が雑誌を買おうと思っていたからであるとか、彼が彼女のことを嫌っているのは、彼女が陰で自分の悪口を言っているかと思っているからである、といった説明は、我々の日常にあふれている。このような説明の背景には、「人は、雑誌を買いたくて、それが本屋にあると思っているならば、本屋へ行くだろう」とか、「人は、ある人が陰で自分の悪口を言っていると思うならば、その人を嫌うだろう」というような、人の心の状態と振る舞いに関する一般的な理解があると考えられる (cf. Churchland 1981)。我々が日常常識的に抱いている、このような心に関する理解の総体は、「日常心理学 (folk psychology)」と呼ばれる。

日常心理学は我々の日常生活に深く浸透している。たとえば我々は、他人の心について考えることで、他人の振る舞いを予測し、なされた振る舞いを理解し、時には非難する。また、自分の心の状態を振り返ることで次になすべきことを考えたり、自分のなしたことから自分の心についての理解を深めることもある。広い意味での日常心理学は、考えのような心の状態だけでなく、感覚や感情といった心の状態に関する理解も含むが、日常心理学の中核をなしているのは、信念 (「…と信じている・思っている・考えている」と記述されるような心の状態) と欲求 (「…

したい・と欲している」と記述されるような心の状態)によって人間の意図的行動を理解するという営みであるといえる。なぜならば、意図的行動こそは合理的存在者としての人間の最も重要な側面であり、人間の意図的行動の説明に用いられるのがまさにこの信念・欲求心理学 (belief-desire psychology) であるからである。

ところで、今日では脳に関する研究をはじめとして、人間に関する自然科学的探求が進んでいる。それゆえ、デカルト的二元論のような立場をとるのでなければ、行為が生み出される因果的メカニズムも次第に自然科学的に解明されることが期待されよう。その際に問題となるのは、我々が遠い昔から持ち続けている日常心理学による心の理解と、行為を産出する脳のメカニズムに関する自然科学的な理解はどのような関係をとらうのか、ということである。現在に至るまで、日常心理学は人間を理解するための唯一の枠組みであり、それに代わりうる枠組みは存在しなかった。しかし、脳のメカニズムが自然科学によって十分に解明されるならば、それは人間を理解するための日常心理学に代わる枠組みとなりうるように思われるのである。

本論文は、人間の行為に関する日常心理学による理解と自然科学的な理解の関係について考察し、両者は体系的な対応関係を持つことなく両立可能であるということを示すことを目的とする。また、それと同時に、両者がそのような形で両立する可能性を認めない立場の背景に、どのような前提があるのかを明らかにすることも目的とした。なお、以下では議論の対象を信念・欲求心理学に限定して議論を進めることにする。その理由は第一に、上で述べたように信念・欲求心理学が日常心理学の中枢を成していると考えられることであり、第二に、この話題に関する従来の議論もまた、信念・欲求心理学を対象としているからである¹⁾。

一

信念・欲求による行為の説明はいかなる種類の説明であり、信念・欲求をはじめとする命題的態度 (propositional

attitude) と呼ばれる心的状態は、人間の物理的状态である脳状態とどのような関係にあるのだろうか。

この問いに対する標準的な解答は、心身問題に関する機能主義の見解に基づくものであろう。機能主義の考え方は次のようなものである⁽³⁾。一般に、ある心的状態は、他の心的状態・知覚・行為のそれぞれと様々な因果関係を持ちうる。他方で、ある脳状態も他の脳状態や身体運動と様々な因果関係を持ちうる。ここで、ある心的状態に関して、その心的状態が持つ因果的連関と同型的な因果的連関を持つ脳状態が存在するならば、この心的状態はそれに対応する脳状態によって個別的に実現されているといえる。また、この因果的連関を持つものであれば、シリコンのような脳状態とは異なる物理的性質を持つものも心的状態を実現することができる。このような機能主義の考え方によれば、日常心理学による行為の説明は、物理的状态である脳状態と身体運動との間の因果関係を記述した因果的説明に他ならず、そこで言及される信念や欲求といった心的状態は脳状態として個別的に実現されていることになるのである。

しかし、信念や欲求を機能主義的に理解することには次のような問題がある。まず第一に、認知科学におけるコネクショニズムが提起する問題がある⁽⁴⁾。コネクショニズムの神経ネットワークモデルにおいては、ある情報はニューロンの興奮パターンとして(顕在的に)表現されるか、ニューロン同士の結合の重み付けとして(潜在的に)表現されるかのいずれかである。そして後者の場合には、様々な情報がネットワーク全体の結合の重み付けのパターンとして表現されうるが、このような場合にはパターンの部分が情報のそれぞれに個別的に対応していると考えすることはできない。したがって、もし脳を一種の神経ネットワークと考えることができるならば、その脳が持つ心的状態のすべてが個別的に実現されていると考えることはできなくなるのである⁽⁵⁾。ここでいえるのは、一群の心的状態が脳状態の総体に対応しているという、全体論的実現であるに過ぎない。したがって、機能主義の主張の一つである、心的状態と脳状態のトークン同一性が認められなくなるのである。

第二の問題は、心的なものの非法則性である。デイヴィドソンによれば、心的状態の関係、より正確にいえばそれらのうち命題的態度の間関係は、物理的状态の場合とは異なり、一群の厳格な法則によって捉えることはできないという (Davidson 1970)。デイヴィドソン自身も心的なものの非法則性を論証しているわけではないが、道徳原理を形式化することの困難や人工知能研究の挫折を見るならば、人間の行為を導く規範を一群の有限な規則に還元することは困難であるように思われ、心的状態に関して非法則性が成立している可能性は無視できないといえよう。そして、もし非法則性が成り立つならば、ある心的状態の持ちうる因果的連関のすべてを、それが関係する法則に基づいて明示化することは不可能であるということになり、その結果、心的状態と物理的状态である脳の状態の同一性をその機能に基づいて特定することはできなくなるのである⁽⁵⁾。

第三の問題は、ある命題的態度の機能を厳密に確定することはできないのではないか、というステイチの指摘した問題である (Stich 1983, chap. 4)。例えば、「地球は丸い」という信念を例に考えてみた場合、子供、ふつうの成人、地球物理学者の三者においては、この信念が心的状態のネットワークにおいて果たす機能は当然異なる。したがって、各人の信念が現に有している機能をその信念の機能と考えることはできないが、他方で、「地球は丸い」という信念が持ちうる機能の全体をこの信念の機能と考えるならば、逆に子供やふつうの成人の信念はこれとは別の信念であることになってしまふのである。このようにして、ある命題的態度を因果的機能によってどのよう厳密に個別化することができるかが問題になるのである。そしてこのこともまた、機能主義の前提である、心的状態の因果的な機能と脳状態の因果的な機能の間の厳密な対応関係を疑問を投げかけるのである。

これら三つの論点は機能主義を決定的に論駁するものではないが、ここからは、少なくとも命題的態度に関して機能主義が成立しない可能性を真剣に考慮する必要がある、ということがいえるだろう。

他方では、脳科学等の進歩から日常心理学に批判的な見方をとる、消去主義 (eliminativism) と呼ばれる主張が

存在する (Churchland 1981)。消去主義によれば、日常心理学は行為を生み出す脳の内的メカニズムに関する本質的に誤った理論であるという。具体的には、次の三点が日常心理学の不適切さを物語っているとされる。まず第一に、日常心理学の体系は二千年以上にわたって本質的に進歩がない。第二に、不合理な振る舞いや精神病者の振る舞い、幼児の振る舞いなど多くの事柄が日常心理学によつては説明できない。第三に、日常心理学のカテゴリーは自然科学のカテゴリーと折り合いがつかないように思われる。それゆえ、日常心理学は、認知科学の知見に基づいた新しい理論に置き換えられるべきであるというのである、つまり、信念や欲求によつて行為を理解するという営みは、科学の進歩に伴つて放棄されるべきである、というのが消去主義の主張なのである。

我々は、このような消去主義の主張を受け入れざるを得ないのだろうか。あるいは、上で述べたような危惧にも関わらず機能主義を保持する道を探るべきなのであるか。しかし本論文では、機能主義の妥当性の如何に関わらず日常心理学の存在を擁護し得るような、第三の立場の可能性を探っていききたい。

二

さて、上で述べた機能主義と消去主義という二つの立場には、次のような前提が共有されていると考えることができるだろう。その前提とは、日常心理学における行為説明が (正しい) 因果的説明であるならば、それは物理的に記述された脳状態と身体運動に関する因果的説明に対応していなければならぬ、というものである (6)。両者の違いは、機能主義がこの条件文の前件と後件のいずれもが実際に成立していると考えののに対し、消去主義は後件の成立を否定し、それによつて前件の成立も否定する、すなわち日常心理学は誤った因果的説明であると考え点にある。いずれにせよ、二つの立場においては、日常心理学が維持されるためには上の条件が満たされる必要があると考えられているのである。しかしここで、この条件文の成立の必要性を批判することによつて、日常心理学に

関する第三の立場を手にすることができる。すなわち、日常心理学における行為説明が因果的説明であるということとを認めながら、この説明が脳過程の物理的な説明に対応していなければならないという考えを否定するというのが、その基本的な方向性である。

さて、機能主義と消去主義が上で述べたような前提を有するのは、因果的説明に関してある特定の見解を有しているからであると考えられる。その見解とは、正しい因果的説明は厳格な因果法則から演繹的・法則的 (deductive-nomological) になされるものでなければならぬというものである^①。そして、このような因果的説明に登場する対象こそが実在する対象であるとされるのである。このような考え方のもとでは、日常心理学の説明から厳格な心理法則の体系を得ることができない限り、真に因果的説明であり、また実在に関する説明であるのは脳に関する物理的説明だけである、ということになるのである。

しかし、このような前提は誤っているように思われる。なぜならば、我々が因果的説明と認めるすべての説明が厳格な法則に基づくものであるとは考えられないし、そのような説明で言及される対象もまた実在として認め得るように思われるからである。たとえば「初夏の暑さがエアコンの売り上げを伸ばした」という説明を考えてみよう。この説明は、日常的には因果的説明と理解できるだろう。しかし、このような説明の背景には、初夏の気温とエアコンの売り上げに関するいかなる厳格な法則も存在しないように思われるのである。

しかし、このことから上の説明は因果的説明ではないのだ、と考えることは馬鹿げているのではないだろうか。すくなくとも、こういつた説明がすべて因果的説明ではないと考えることは、反直観的であるように思われる。ここで必要なのはむしろ、ある説明が因果的説明であることに關して別の基準を採用することであろう (C. F. Woodward 1984)。たとえば一つの可能性として、その説明に基づいて適当な反事実的条件文が成立するような説明を因果的説明と考える、という基準が考えられる^②。上の説明の場合ならば、この説明によって我々は、「初夏が

それほど暑くなかったならば、エアコンの売り上げは伸びなかっただろう」ということを理解できるのである。ある説明が因果的説明であるかどうかを、このような理解が成立するかどうかによって判定するならば、このような日常的な説明も、厳格な法則の有無に関わらず因果的説明であると考えることができるのである⁽⁹⁾。

日常的な因果的説明一般についての以上の議論からは、日常心理学による行為説明に関して、次のようなことがいえるだろう。すなわち、日常心理学の体系を厳格な法則として体系化することができないとしても、そのことから日常心理学が因果的説明ではないということも、日常心理学は誤った因果的説明であるということも結論づけられない。なぜならば、これらの考え方は、因果的説明は厳格な法則から演繹的・法則的になされる説明でなければならぬ、ということ为前提としているからである。このような前提をとらずに、たとえば上で述べたように、因果的説明をそこから得られる反事実的条件文の成立から理解するならば、他の多くの日常的な説明と同様に、行為的日常心理学的な説明も因果的説明として認めることができるのである。

さて、以上のような議論から、日常心理学の説明は因果的説明と見なしうる、ということがいえたとしても、この説明が自然科学の物理的な説明と対応関係にない、という問題は残っている。このことから、結局正しい説明は物理的な説明であり、それと対応関係にない日常心理学の説明は誤った説明である、と主張しうるように思われるのである。これに対しては、日常心理学の説明と物理的な説明に対応関係を求めるのは過剰な要求である、ということを用いた以下の議論で明らかにしよう。

日常心理学の説明と脳過程の説明に対応関係を想定するのは、このような対応関係が成り立たないならば二元論を受け入れることになるのではないか、という危惧があるからであると考えられる。しかし、次に述べるような「弱い付随性 (weak supervenience)」が成り立つことさえ認めれば、最低限の物理主義ないしは自然主義は維持できる

のである⁽¹⁰⁾。一般に、対象のある性質が決まれば、もう一つの性質も決まるが、逆の関係は成り立たないというとき、後者の性質は前者の性質に付随しているといわれる。たとえば機能主義では、脳やシリコンのある一部分の物理的狀態が決まれば、その心的狀態が決定されると考えられるので、まさに付随性が成立することが認められている⁽¹¹⁾。しかし、上で述べたように、心的狀態と物理的状態の間に機能主義の想定するようなトーン同一性が成立するという保証はないので、機能主義をとらないならば付随性をより弱い形で理解する必要がある。より弱い付随性とは、世界全体の物理的状態が決まれば、世界全体の心的状態も決定されるという形での付随性である。ここではある脳状態とある心的状態の間の付随性ではなく、世界全体の物理的性質と心的性質の総体の間に付随性が成立するということが想定されているだけである。しかし、心的なものと同物理的なものという二種類の実体が存在するという二元論の考えを否定するには、この前提で十分なのである。

このような弱い付随性の想定が妥当であることは、心的状態以外に目を向けてみればより明らかであろう。たとえばある人の健康状態について考えてみよう。ある人の、風邪をひいているという健康状態は、その人の特定の部分、例えば喉や血液の物理的状態に付随していると考えすることはできない。しかし、その人全体の、あるいはその人とその環境をなす世界全体の物理的状態が決まれば、この人の健康状態は一義的に決定されるだろう。そして、このような関係さえ成り立てば、物理的実体と健康的実体の二元論のようなものを想定する必要はないのである。そして心的状態についても、ある人間と、その環境をなす世界全体の物理的状態が決まれば、その人の一群の心的状態も一義的に決まると考えることができるならば、物理的実体とは別に心的実体を想定するような二元論を採る必要はないのである。

さらに、以上の議論からは、機能主義や消去主義が弱い付随性以上の関係を要求するならば、心的状態以外の日常的な状態に関しても問題が生じるということがわかる。例えば、ある人が風邪をひいて、また二日酔いでも

あるという二つの健康状態にある場合を考えたときに、弱い付随性の想定のもとでは、共にその人全体あるいは世界全体の物理的状态に付随していると考えることができると対し、機能主義のように付随性を強く理解すると、それぞれの健康状態が時空的に別個に個別化される物理的状态のトーンにそれぞれ付随していなければならぬことになるのである。果たして、このような物理的状态をそれぞれに定めることは可能であろうか。一般的にいつ、強い付随性の要求がなされるならば、我々が日常言及している多くの状態には、それに対応する物理的状态を見いだすことができなくなるだろう。この結果、我々は日常心理学の語彙に加えて数多くの日常的な語彙を消去しなければならぬということが帰結するならば、強い付随性の要求はきわめて受け入れ難いものであるように思われるのである⁽¹²⁾。

さて、以上の議論から、日常心理学の理解に関する第三の立場の基本的な主張が明らかになった。第一に、日常心理学による行為説明は、それが一群の厳格な法則に基づくか否かによらず、因果的説明であるということができ、第二に、日常心理学による説明と、自然科学による行為の物理的説明の間に対応関係が見られないとしても、両者の間に弱い付随性の関係が成り立つならば、日常心理学による説明は誤っていることにはならず、また二元論を主張することにもならない。この二つの主張を基本とする立場を、(命題的態度の)「素朴实在論」と呼ぶことにしよう⁽¹³⁾。

三

さて、以上のような議論は、本当に日常心理学の妥当性を擁護する第三の立場を提起し得ているのだろうか。以下では、考えられるいくつかの反論を検討することによって、「素朴实在論」の立場をより明確にしよう。

まず第一の反論としては、次のようなものが考えられる。上で述べたように日常心理学が正しい因果的説明とし

て認められるならば、同様にしてフロジストンによる燃焼の説明や、狐憑きによる説明などもまた、正しい説明であり、フロジストンや狐憑きのようなものも実在しているといえることになってしまふのではないだろうか。

この反論に対しては、次のように答えることができる。我々が用いている説明が正しい説明であり、実在について語っているといえるためには、あるいは、ある説明がそもそも適切な因果的説明として受け入れられるためには、いくつかの制約を満たしていることが必要である。第一の制約は、日常的な説明の体系、あるいは日常的世界像全体は内的整合性を保っていなければならないことである。たとえば我々が一方で心霊のようなものは存在しないという信念を持っているならば、他方で狐憑きによる説明などを行うことはきわめて不合理である。このような制約を考えれば、ある説明そのものが因果的説明の形態をとっているかのように見えても、それを無条件で受け入れる必要はないのである。第二の制約はミクロな科学的世界像との関係における制約である。上で述べたように、日常的世界像と科学的世界像は強い付随性の関係にある必要はない。しかし、両者の間には弱い付随性が成立していることが必要である。したがって、もし我々が狐憑きによる説明のようなものを受け入れるならば、その説明が何らかの形で科学的な世界像における説明にも反映されている必要があるのである。もし、このことが認められないならば、すなわち、物理的には全く同様に記述される二人の人物のうち一人だけが狐憑きであるという可能性が認められるならば、物理的には記述できない実体を認める二元論、あるいはそれ以上の多元論を認めることになり、自然主義そのものを放棄することになってしまうのである⁽¹⁴⁾。このようなことを考えれば、日常心理学は正しい因果的説明であるという主張は、それが単に因果的説明の形をとっているという以上のことを意味していることがわかるだろう。

第二に、次のような反論も考えられるだろう。日常心理学の行為説明が因果的説明であるということを示すだけでは、日常心理学の適切さを保証するには不十分ではないか。消去主義がいうように、日常心理学が不適切な説明

であると考えられるのは、不合理な振る舞いや精神病者の振る舞いなどをうまく説明できないというように、その説明能力に限界が見られるからではないだろうか。

この批判に対しては、次のような二つのレベルで応答できるだろう。まず第一に、そのような例も、実は多くのものは日常心理学で扱うことが可能であるということが出来る。こういった事例で問題なのはむしろ、本人の説明と行為を合理化する説明が食い違ったり、帰属される信念や欲求が通常の人と大きく異なっているということなのである。たとえば精神病者は、「火星人の命令が聞こえるが、この命令は自分以外の人には聞こえない」というような信念のもとで合理的に行為していると説明できるかもしれないのである。たしかに、それでもなお日常心理学によって説明できない振る舞いもあり得るだろう。しかし第二に、そのような現象が存在するのは日常心理学だけに限ったことではないのである。ここでは経済学的な説明と比較してみよう。例えば、証券取引所のコンピュータが故障したために、株価が異常な動きを示したとしてみよう。あるいは、戦争によって国の経済システムが麻痺した結果、経済学理論では説明できないような状況が生じたというような場合を考えてもよい。このような異常な状況は、経済学理論のみによっては説明することはできず、他の何らかの（おそらくはよりミクロな）レベルの説明によってのみ説明可能であろう。このような事態はいわば、経済システムの故障なのであり、経済学理論はこのような事態に対しては、それが異常な事態であることを明らかにすることができのみである。日常心理学に關しても、同様のことがいえるだろう。つまり、日常心理学が適用できない事例は、いわば人間の故障であり、それを説明できるのはよりミクロなレベルの、例えば生理学的な説明なのである。そして、日常心理学は、このような事例に対しては、それが異常であるということを示しうるのみなのである⁽¹⁵⁾。このような事態から自由であるのは、おそらくは理想的な物理学理論のみであろうから、この点で、日常心理学のみが他の説明に比べて劣っているということはいえないのである。

さらに、次のような反論もあり得よう。以上の議論が妥当であつたとしても、このことは、日常心理学とは根本的に異なる説明の枠組みが可能であるということを否定するわけではない。したがつて、脳科学の知見に基づいて新たな人間行動の理論を構築し、日常心理学に代わつてこれを採用することは可能であるはずである。そして、新たな理論が脳科学に基づいているゆえに、説明能力の点で優れているならば、我々はまさにこのような枠組みを採用すべきではないのか。

これに対しては次のように答えることができる。まず、このような枠組みが、単なる記述の枠組みではなく、我々が実践の場で用いることのできる理論として可能であるかどうかという点には疑問がある。つまり、たとえ我々が正確な脳科学の理論を手にしたとしても、それを用いて実時間的な制約の中で他人の振る舞いを予測することができるといふことは疑わしいのである⁽¹⁶⁾。ここで、上のような可能性を主張する人は、我々が実践の場で用いるのは脳科学の理論そのものではなく、それを実用性を高めるために簡略化したものであるといふかもしれない。しかし、それでもなお、我々の知覚能力では他人の脳状態について何らかの道具の助けなしに知ることは不可能であり、したがつて脳状態をもとにした理論を我々の知覚能力だけで用いることが可能であるかどうかは疑わしい。我々の計算能力についても同様で、我々の計算能力では、新しい理論によつて実時間の制約内で他個体の振る舞いを予測できる保証はないのである。これらの点を考慮すれば、我々自身の認知能力によつて、脳状態に基づいた新しい理論を使用するという可能性は、疑わしいものではないだろうか。もう一つの問題点は、他の人間もまた現に日常心理学を用いているという点である。そのような状況においては、他の人間の振る舞いを予測する最良の手段もまた日常心理学であるということが考えられる。たとえ脳状態に基づいた予測がより正確なものであるとしても、その認知的および時間的なコストは日常心理学を用いることに比べて極めて高いのである。

以上のような検討によれば、日常心理学に関する素朴実在論に対する反論は、いずれも説得力を持たないように

思われる。しかしそれでもなお、次のような反論が考えられるかもしれない。以上の議論は代替的な理論の可能性を論理的に否定するようなものではない。したがって消去主義はなおも可能である、と。しかし、以上の議論から考えれば、消去主義、あるいは日常心理学に対する代替理論の可能性は、現状では単なる論理的可能性に過ぎない、ということがいえるのではないだろうか。結局のところ、消去主義の本質的な不適切さは、その立場が単に論理的に可能であるということから、経験的な可能性を吟味することなしに消去主義の妥当性を主張している、というところにあるのである。しかし、上で述べたような人間の知的能力の有限性などを真剣に考慮するならば、消去主義を真剣に検討すべき時は、それが我々にとつて十分な経験的可能性となつたときではないだろうか。

最後に、以上の議論によつて明らかになつたことを要約しよう。日常心理学は、厳格な因果法則に裏打ちされているとは考えられないが、中間的なサイズの日常的事物 (middle-sized objects) や社会的現象などに関する説明と共に、日常的な実在に関する因果的説明として機能している。また、日常心理学は、人間の内的なメカニズムの物理的な記述と対応関係にあるとは考えられないが、このことは二元論を帰結するわけではない。自然主義を維持するためには、両者の間に弱い付随性の関係を認めることができれば十分である。日常心理学と物理的な記述の間には何らかの対応関係が成立していなければならないというのは、還元的な物理主義あるいは極端な科学主義のドグマであり、日常的事物や社会現象などを例に考えれば、このようなドグマを支持する必然性は存在しないのである。

注

- (1) したがって、以下では、特にことわりのない場合には日常心理学という言葉で信念・欲求心理学を指すことにする。
- (2) ここではブロックによる機能主義の定式化 (Block 1986) を念頭に置いている。

- (3) この論点は信原一九九六に詳しい。
- (4) 正確にいえば、全体論的に実現されるのは潜在的に表現される信念のみである。例えば時計を見て十時であることに気づき、もう出かけなければと思う場合を考えてみるならば、「今は十時である」という信念および「すぐに出かけなければならぬ」という信念は、神経ネットワークモデルでは入力パターンと出力パターンに相当し、これら是一群のニューロンの興奮によって個別的に実現されていると考えることができる。これに対して、入力から出力を導くのに用いられている、例えば「今日は十一時に待ち合わせがある」とか「家から待ち合わせ場所まで一時間かかる」といった信念は、ネットワーク全体における結合の重み付けとして全体論的に実現されていることになるのである。
- (5) ウィリアム・チャイルドがその著書 (Child 1994, chap. 2) において、「心的なものの非法則性を「コード化不可能性」として捉えなおし、機能主義と両立しないことを論じている。
- (6) 本論文では第一の前提、いわゆる行為の因果説は妥当なものとして受け入れる。その最大の理由は、我々は心的状態を引き起こすことで因果的に人の振る舞いに影響を与えうるという理解が日常的にも成り立っていると思われるからである(例えばランナーが盗塁すると思わせることによってピッチャーに直球を投げさせる、など)。
- (7) ここでは厳格な法則という表現を用いたが、最終的に問題になるのは日常心理学による説明と自然科学的説明とのギャップであるので、正確にいえば、ここで必要なのは例外吸収条項を持たず完全に例外のない理想的な物理学的法則のようなものではなく、一群の有限な法則群という程度であるといえる。心的なものの非法則性の問題の本質は例外吸収条項の有無にあるわけではない、という点については、エヴニン(Ervine 1991, 邦訳 pp. 35-8)を参照のこと。なお、エヴニンに従えば、デイヴィドソンのいう厳格な法則も同様に理解すべきであろう (cf. Davidson 1970)。
- (8) この基準に対しては、反事実的条件文の妥当性を評価するためには結局法則が成立していることが必要なのではないか、という反論が考えられよう。しかし、反事実的条件文の評価には、例外のない厳格な法則も、有限な一群の法則群も必要ないよう思うられる。ここでは単なる経験的な一般化のようなもので十分であるし、場合によっては適当な一般化の存在しないような一回性の強い出来事に関しても、端的に反事実的条件文の評価が成立することも考えられるのである。
- (9) ただし、この基準が、ある説明が妥当な因果的説明であるかどうかの必要十分条件であるとは考えていない。たとえば、この基準だけでは、「空の色が違っていたら、この絵は台無しになっていただろう」というような説明も因果的説明であることになつてしまうからである。しかし、これに対しては例えば、「二つの異なる出来事に関する反事実的条件文が与えられる」とい

うように基準を改良することで対処できるだろう。しかしいずれにせよ、因果的説明の必要十分条件を与えることは本論文の目的ではないので、この点に関してはオープンにしておきたい。

- (10) 「弱い付随性」という表現はジョン・ホーシランなども使っている (Haugeland 1982)。
- (11) それによって論点が本質的に左右されることはないと考えられるので、ここでは性質と状態とを同様に論じている。
- (12) 消去主義は信念や欲求に関する消去主義にとどまらず、日常的な中間的サイズの対象全体の消去主義を帰結するはずであるという点は、パトナムによっても指摘されている。(Putnam 1988, pp. 59-60) 他方消去主義の側では、中間的なサイズの対象 (middle-sized objects) に関する日常物理学 (folk physics) と日常心理学との類似性が指摘されることはあるが、日常物理学に関して消去主義の主張がなされることはない。

(13) ここで素朴実在論と名付けた見解とはほぼ同様のものとして、ホーガンとグラハムの「南部原理主義 (southern fundamentalism)」(Graham and Horgan 1988, Horgan and Graham 1991)、ハイカーの「実践的実在論 (practical realism)」(Baker 1995)、ホーンズブローの「素朴自然主義 (naive naturalism)」(Hornsby 1997) などを持ち出すことができる。

(14) 実は、なぜ弱い付随性を認め、このような二元論や多元論を排除するのかということに対しては、弱い付随性を認め、あるいは意味での「物理的なものの優位」(Haugeland 1982, p. 99) を認める方が直観にかなっている、という程度の理由しかここでは提示できない。ただし、本文で述べたように日常的世界像と科学的世界像の整合性を重んじるということが、このような立場の積極的な根拠になりうるかもしれない。

(15) では、日常心理学の本来の対象領域はどのように特徴づけることができるだろうか。大雑把に言えば、人間の環境に対する適応的な振る舞いということになるだろう。

(16) 日常心理学の本質が記述というよりも実践にあるという点はデネットも指摘している (Demett 1991)。

文献

- Baker, L. R., 1995, *Explaining Attitudes: A Practical Approach to the Mind*, Cambridge: Cambridge University Press
- Block, N., 1980, "Introduction: What is Functionalism?", in Block, N. (ed.), *Readings in Philosophy of Psychology vol. I*, Cambridge MA: Harvard University Press, pp. 171-84
- Child, W., 1994, *Causality, Interpretation and the Mind*, Oxford: Clarendon press

- Churchland, P. M., 1981, "Eliminative Materialism and Propositional Attitudes", *Journal of Philosophy* 78, pp. 67-90
- Davidson, D., 1970, "Mental Events", in Foster, L., and Swanson, J. (eds.), *Experience and Theory*, London: Duckworth, reprinted in Davidson 1980, Essays on Actions and Events, Oxford: Oxford University Press
- Demett, D. C., 1991, "Two Contrasts: Folk Craft versus Folk Science, and Belief versus Opinion", in Greenwood, J. (ed.), 1991, *The Future of Folk Psychology: Intentionality and Cognitive Science*, Cambridge: Cambridge University Press
- Ervine, S., 1991, *Donald Davidson*, Cambridge: Polity Press (『ドナルド・デイヴィッドソン』 加藤謙一監訳 藤野昌隆訳 一六六六頁)
- Graham, G., and Horgan, T., 1988, "How to be Realistic about Folk Psychology", *Philosophical Psychology* 1, pp. 69-81
- Haugeland, J., 1982, "Weak Supervenience", *The American Philosophical Quarterly* 19, pp. 93-103
- Horgan, T., and Graham, G., 1991, "In Defense of Southern Fundamentalism", *Philosophical Studies* 62, pp. 107-34
- Hornsby, J., 1997, *Simple Mindedness: In Defense of Naïve Naturalism in the Philosophy of Mind*, Cambridge MA: Harvard University Press
- 信原幸弘'一九九六'『心' 魂' 意識と身体』『哲研』 巻四七号' 四三-五四頁
- Putnam, H., 1988, *Representation and Reality*, Cambridge MA: Harvard University Press
- Sich, S., 1983, *From Folk Psychology to Cognitive Science: The Case Against Belief*, Cambridge MA: MIT Press
- Woodward, J., 1984, "A Theory of Singular Causal Explanation", *Erkenntnis* 21, pp. 231-62, reprinted in Ruben, D.-H. (ed.), 1993, *Explanation*, Oxford: Oxford University Press